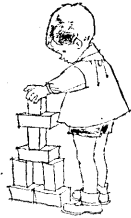


## 幼児前期の思考の発達

— 1 ~ 3 才 —



浅見千鶴子

思考は精神機能の発達の中で最も高い段階に達することができる。それは系統発達においても、個体発達においても同じくいえることであって、動物において思考作用に類するものが観察されるのは背椎哺乳動物の中でも比較的高等な種類に限られる。人の発達過程においても真の意味での思考（抽象的、論理的思考）が始まるのは十二才以後といわれる。他の諸機能（知覚、記憶など）はすでに幼児期のうちにおよその発達をとげているのである。

思考とはどのような精神の働きを意味するのであろうか。定義によれば有機体が課題場面に遭遇したときその解決の方向に行動する際の精神の働きである。主体にとっての課題場面とは基本的にはその生存にとって障害となるべき事態を意味するが、実際にはさまざまの事態があり得るし、その困難さの程度、複雑さの程度も主体と事態との相互関係でさまざまになっていることが考えられる。ことに人間の段階にもなれば単なる生存を完了するための手段にとどまらず、思考は人間生活を深め発達させるための文化創造の源泉でもある。思考の働きは全く、人間において最高の段階に達し、人間を人間たらしめ、また現在のこの目覚ましい文明を築き上げしめた力であるといえよう。

このように思考の働きも動物の段階におけるごくその萌芽的な次元から文明人の最高の次元に至るまで広い中と段階が考えられ、この推移がそのまま人間の生まれてから成人までの間の精神発達上に

おける思考の発達にもあてはまるのである。すなわち、出生直後の新生児は感覚器官・神経系の構造は生理学次元において一応できあがり、その機能も一部のものを除いては感覚・反射などかなり進んで現われる。しかし、知覚・認知の働きにおいてはほとんど未分化の状態であり、新生児の精神状態は朦朧状態にあるといわれる。まして、このころの赤ん坊に思考の働きなどは全く見られないといつてよい。これがやがてことばを覚え出して、四、五年もすれば全く不自由なく自分の思っていることを他人に伝えられるほど目覚ましいことばの発達をとげるのである。

しかし、思考作用に関してはことばの使用の開始前にすでにその萌芽は見出されているとはいえ、それは、具体的・直観的次元における問題解決行動であり、チンパンジーの段階における思考と本質には大差がない。真の人間に特有の具体性を脱したことばによる思考が本来の面目を發揮するのは十二才以後であるといわれ、基礎的なことばがほぼ獲得された幼児後期においても、その思考は未だに具体性・直観性から完全に脱し切れず、言語的・論理的な思考はごく未だ萌芽的であり、幼児特有の種々の思考における特徴を包含している。すなわち、未分化、情緒的、自己中心的、非論理的魔術的などの特徴がそれである。

幼児前期（一―三才）では依然として思考の発達は萌芽期にとどまり、思考とも名づけることのできない「前思考」の時代といふこ

とができよう。この時期は全般に精神発達としては目覚ましいものがあり、認知・記憶・学習の面ではその進歩が著しい。ことに画期的なことは習得であり、この時期のすべての精神機能の発達は後の思考の発達の基礎と素材を与えるものとして意味がある。

ピアジェ<sup>(1)</sup>は幼児の論理的思考の発達を次のような三つの位相に分けて考察している。

第一位相 感覚運動的知能の形成

第二位相 直観的・象徴的思考の形成

第三位相 論理的・具体的思考の形成

第一位相は出生時から生後十五か月くらいの乳児期までの発達に当り、第二位相は主として幼児期に当る六才までの発達を取り扱う。第三位相はそれ以後十二才頃までに当る。幼児前期は第二位相のごく最初の段階に当るが、ピアジェは第一位相を六つの段階に分けてくわしい考察を行ない、第二位相ではあまり細かくは分けていない。主として乳児期の知能の発達に重点をおいて説いているのはたしかにこの時期は精神機能の開始期として意味があり、出生後の環境に適応することが知能のはじまりであり、知的機能の萌生元と考えられる。反省が欠けている故に未だこの感覚運動的知能は論理的ではないが論理的思考に対する「機能的」準備を形成するものである、ここにピアジェの見解に従って初期の発達をたどって見よ

う。

第一段階。生得的反射機制作の練習。出生の際にすでに赤ん坊は一連の反射機制作をそなえて（吸乳反射・把握反射など）生まれるが、二―三日するとすでにその反射機制作は訓練され環境への適応が増してゆくのが観察される。機能がすでに備わっている反射機制作に練習が見られるのはある程度、精神活動が行なわれていることの最初のしるしを示すものである。

第二段階。第一次循環反応。赤ん坊にとって快を与える行為は繰り返され循環反応となる。生後二か月頃からそれが最初の能力と習慣になってくる。赤ん坊は偶然に指をしゃぶってそれが強い快を与えるとますますこの行為を求めめる。偶然にオムツのボタンをつかむとこの把握活動を押え切れなほど繰り返す。このようにして偶然に発された行為を繰り返して練習し、最初の能力を獲得してゆく。この行動様式は環境に対する使用範囲を拡げ、環境への能動的な適応過程の前提をなすのである。

第三段階。第二次循環反応。三か月と九か月の間に、偶然に獲得された能力と習慣から意図的に遂行された知能的行為への移行が観られる。知能的行為には手段と目的の分節があり、この点から第一次循環反応と区別される。子どもは一度成功した手段はますます自分の目的を満すことができることを知る。たとえば知らずにベッドの天井から下っている紐を引っ張って、それについていた鈴を鳴ら

すことができた子どもはその後、意図的に何度もこの紐を引っ張り、おもしろいいたずらを繰り返す。赤ん坊はまだ紐の限界を知らないもので、母親の注意をひくためや、遠いところにある玩具を引きよせるためにも紐を引っ張ったりする。はじめ意図なしに、それから意図的に環境へ働きかけることによって子どもは慣れた対象に運動を適応させるばかりでなく、絶えず、新しい対象を自分の本来の循環反応の中に引き入れてゆくことを学んでゆく。

第四段階。獲得的行動シエアの協応とその新しい事態への使用。九か月以後になると、意図的にある一定の目標に向けられた行為の最初のシエア（図式）ができてあがるのが観察される。新しい対象物は組織的に検べるような行動がとられる。たとえば、人形が与えられると、凝視したり、振りまわしたり、押したり、叩いたり、口の中へ突っ込んだり、地面に投げつけたりして、それも何の役に立つのか験しているように見える。このようにして、新しい対象が今までもっている行動様式のレバトリーの中に組み込まれる。同時に活動そのものを通して働き合い、分化が行なわれる。

第五段階。能動的実験を通しての新しい行動シエアの発見（第三次循環反応）。出生第一年目の終り頃になると、子どもは新しい事態に適応するために創造的な手段を発見する。赤ん坊は手のとどかないところにある玩具を引きよせるために、敷布を引っ張る。紐の先についている玩具を紐を引いてひきよせる。サークルの外の菓子

をりきよせるために格子を道して棒を使うようになる。このように道具を使用したり、創り出すことをはじめ。

第六段階。感覚運動的知能から表象への移行。一年半頃には感覚運動的知能は最頂点に達する。子どもは行動様式の結果をいろいろ験さなくても表象できるようになる。そして迅速に新しい事態に適應する。これはビューラーが「アー体験 (An-Erfahrung)」と名づけ、ゲシュタルト心理学者ケーラーは突然の「見通し (Einblick)」と呼んだものである。しかし、これはゲシュタルト心理学者のいう先行経験と無関係な知能行為と考えるよりもむしろ連続的な発達過程の完成であり、最高に達したものである。それはつねに先行の行動に条件づけられて成立する。

行動様式は今や、内的に遂行されるようになり、それはすでに「思考」と呼ばれるべきものである。感覚運動的実験化から内面化した表象への移行過程は十四か月児の例によく観察される。子どもは外的に行なわれた行動を内的に模倣して表象しようと努力する。子どもは現在の対象物や人物を模倣するばかりでなく、いなくてもでも遊戯的に表現する。この象徴的模倣的表現は思考への第一歩を意味する。

ここで第二位相に入る。

子どもは一年半頃からまわりのことを学びはじめ。話すこと、他人のことを理解することは一定の記号に一定の事柄が関係

していることを把握することを意味している。しかし、最初はまたこの関係ははっきり決定されてはいなくて、論理学的な意味での真の概念はできあがらない。それは直観的な概念とか前概念的なものであり、まだはっきりと決まった意味をもっていない。擬声語である「ワンワン」はあるときは一定の犬を、あるときはすべての四つ足動物を、あるときは窓の前を動くすべてのものを意味する。ある子どもはオジイサンを見かけたとき「オジイチャン」と呼ぶばかりでなく、強い願望をもつときもそう叫んだ。それは自分のいうことをきいてくれるオジイチャンのように自分の願いを満たしてほしいという意味がこめられている。

前概念的な思考は直観的であり類推に基いた、非可逆的な性格をもっている。このような思考の形成は大体六才までに行なわれ、七歳目に入ると決定的な変化が起り、可逆的な論理的、具体的な操作が行なえるようになる。そして、十二才頃からはじめて形式的思考が可能になる。

(2) ケーラーはチンパンジーを使って、知恵試験を行ない、言語以前の段階においても知能の萌芽、すなわち、真の意味の思考の萌芽が現われることを証明した。それは人間の知的行動と同じタイプの種類のものの萌芽であり、言語の発達とは無関係に現われる。問題場面において解決行動としてとられた道具の使用と作製、廻り道など

はいわゆる洞察行動を構成するものとして指摘したことは有名である。チンパンジーの洞察行動は具体的なか場の中で現われる。われわれはこれを具体的思考と名づけ、具体物を欠く言語のみ、記号のみの世界で行なわれる抽象的思考と区別する。

人間の幼児も出生直後からことばを学習しはじめる。一才半頃までの間は言語以前の段階にあり、その思考様式は当然、具体的思考であり、おそらく類人猿の行なう思考と共通なものがあつたことは推定され、この段階の幼児にチンパンジーに行なつたと同様の問題解決課題を与えて比較した研究がいくつかあるが、いずれも本質的にケラーの結果との一致を見た。しかも、その進歩の程度は一才九か月頃まではチンパンジーの方が優つてさえいるということである。しかし、人間の幼児がことばを獲得して、その使用が始まると思考の進歩は著しく、速やかにチンパンジーを凌駕してしまう。

幼児のことばは、ほぼ四才の終り頃には、社会的交渉の道具および思考の手段として役立つ程度の成熟を見るようになる(ピアジェ)。(ことばの本質的な機能はシンボル(象徴)の機能である。シンボルは物事の具体性を離れて、抽象の世界で代表し、表現する働きである。思考においても具体物なしに作用せしめる。ことばを使用して思考を行なう段階になるとそれまでの具体的事象の制約を脱し、抽象的な思考のさまざまな次元が開けてくることになる。

幼児前期はまさにことばを獲得しかけてきて、チンパンジー的な

具体性の世界から抽象性の世界へ移行する過渡期にあるといつてよいであろう。ことばの学習の初期段階では未だことばは真のことばとしての機能を備えたものではなく、幼児は未だに物事の具体性の中で情動に強く結びつけられて行動する。

幼児のことばの学習の過程ではことばのもつ意味の理解にさまざまな推移がある。最初は何事の全体的な場面と結びついて使用されるために、一つの単語がこどもにとっては全体場面を意味し、さまざまな内容がこめられる。シュテルンのいう一語文がこれに当る。次第に分化が行なわれ、意味の限定が出てくる。また、物の名前を発見し、ことばのもつ命名作用が分ってくる。伝達の機能が開けるに従つて、一般化が行なわれ、概念が形成されはじめる。この概念形成の過程として種々の段階を経て、はじめて真の概念に到達する。子どものもつ概念のレベルに従つて、その思考はさまざまな特徴をもつことになる。いわゆるアニミズム、実念論、人工論、自己中心的、情緒的、非論理的、魔術的、現存性などとりあげられている幼児の思考の特性はここに起因するのである。

ヴィゴツキーは真の概念に到るまでの子どものもつ種々の前段階をあげて論じており、真の概念に達するのは過渡的年令(小学校終了の十二才を意味する)になつてはじめて発達段階を終了したときであるといつている。このままに見ると幼児前期は言語的思考の開始のごく初期段階であり、こどもはこの時期には言語の習得に全力

を注いでいる。ヴィゴツキーは思考と言語の発生の起源はそれぞれ別なものであるが、ほぼ二才頃にそれまで別々に進んできた思考と言語の発達路線が交叉し一致するようになり、人間に固有なまったく新しい行動形式に出発点を与えることになると述べている。

ヴィゴツキーによる概念の前段階の発達は三段階に分けられる。

第一段階は非組織的な未整理な集合の形成であり、混同心的な事物の堆積が行なわれる時期で、幼児の行動に最もしばしば現われる。

幼児は概念の形成を通じて解決されるような問題の前に立たされると、何らかの対象の群れを分ける操作をするが、これは十分な内的根拠なしに、即ちそれを形成する諸部分の間に十分な内的関係もなしにまとめられた群である。

この段階は更に三つの水準に分けられる。第一水準は子どもの思考における試行錯誤の時期であり、第二水準は子ども自身の知覚によって暗示された主観的結合に導かれる。事物はそれらに固有な子どもにより明らかにされた一般的な特徴によってではなく、子どもの印象の中でそれらの間に認められた類縁関係により一列に並べられ、同じものとされる。

第三水準では、概念と等価な混同心的な形象がより複雑な基礎に基いて形成され、子ども自身の知覚の中で以前に既に結合されていたさまざまな群の代表を一つの意味にまとめ、ことに基礎をおく。

第三水準に到達した子どもは次の複合的思考と名づけられる第二

段階に登る。この段階になるとはや子どもはある程度、自己中心性を克服し、自分自身の印象の結合を事物の結合と取り違えることをやめ、混同心性からの離脱と客観的思考の達成へと決定的な前進をとげるのである。

ヴィゴツキーのこのような発達段階を幼児の発達段階にあてはめて考察すると、第一段階が幼児期に当り、第二段階は児童期に当り、そして幼児前期は第一、第二水準あたりに当る。ヴィゴツキーの指摘したように幼児前期におけることばの習得の開始は、思考の性格に新しい面を開き、それまでの具体的思考とは全く質的に違った豊かなシンホルの世界を展開させる曙となるのである。

#### (引用文献)

- (1) Piaget, J. & Inhelder, B. Die Psychologie der frühen Kindheit——in "Hand buch der Psychologie" hrsg. von D. Karf, 1951, 232—271
- (2) Köhler, W. Intelligenzprüfungen an Menschenaffen 1917 (宮原一訳、類人猿の知恵試験、岩波書店)
- (3) Richardson, H. M. The Growth of adaptive Behavior in Infants. Genet. Ps. Mono., 12, 1932, 195—359
- (4) Gotschaldt, K. Der Aufbau des Kindlichen Handelns. Z. ang. Ps., Dth. 68, 1933, 228
- (5) 森重敏、課題場面における幼児の知能的行動について、千輪浩先生選題記念論文集、昭二七
- (6) ヴィゴツキー著、柴田義松訳、思考と言語、明治図書